

教師としての自治的・組織的な生き方

専攻長 中野博之



昨年度のニュースレターにも書かせて頂きましたが、本学教職大学院では、外部資金を獲得して昨年度より3カ年に渡って組織的に「教師のウェルビーイング」に関わる研究を行っております。この研究では「学校の自治」という側面から「教師のウェルビーイング」を考えており、勤務している学校の子どもたちの実態や課題を教師自身が捉え、子どもたちに即した教育活動を自治的・組織的に行うことができているのかどうかで「教師のウェルビーイング」を考えることといたしました。そして、青森県教育委員会のご協力を得て、県内の全公立学校で勤務されている先生方を対象に、アンケート調査を行いました。このアンケート調査では約3千名の県内の先生方からの回答を得ることができ、ご協力頂いた先生方、そして、青森県教育委員会の方々に心から御礼申し上げます。

現在、アンケート調査の結果分析を進めております。分析は緒に就いたばかりではありますがその中で観えてきていることは、県内の多くの先生方は勤務校が抱えている課題を同僚と共に解決していくことについては、たとえ困難であろうともやり甲斐をもって立ち向かっているということです。これは「自治的に同僚と共に教育活動を行っている」という実感が県内の先生方の「ウェルビーイング」に大きく関わっていることを示しています。

近頃、とても気になっていることの一つに、問題点や課題に対して、自分事と捉えず、評論家のように原因を作っている（と決めつけている）人・組織に責任を転嫁してしまっている人が教育界に限らず多いことがあります。上記の県内の先生方の「自治的・組織的」な生き方とは真逆の生き方であり、他者に協力してもらえないことを自身の考えの浅さではなく、自分の意見に賛同しない他者に責任を押しつけている生き方とも言えます。本学の教職大学院に限らず、多くの教職大学院では「理論と実践の往還（本学は「融合」も加わる）」を設置の理念としています。これは、理論を研ぎ澄ませ同僚を説得できる言葉を獲得するだけでなく、問題点や課題の解決のために同僚と共に実践できる能力の育成を想定しています。本学教職大学院の院生の皆さんには、こうした同僚を説得できる言葉と共に問題点や課題の解決のために同僚と協力し、やり甲斐をもって実践できる能力を身に付けて欲しいと願っております。

「教育実践研究発表会」を開催(2月10日)―対面・オンライン併用―

教職大学院では、在学中に3回、教育実践研究発表会を行います。1年次院生の年次報告会と2年次院生の最終報告会を、令和7年2月10日(月)に、青森県総合学校教育センターを主会場とし、Zoomによるオンラインを併用して開催します。ミドルリーダー養成コースの院生は、2年生になると現任校で勤務しながら実践と研究を重ね、ストレートマスター(学部卒)の院生は、教科・領域等での指導を通して研究に取り組んでいます。次頁に院生の研究テーマを掲載しました。多くの皆様に御参加いただき、御指導・御助言をいただければ幸いです。参加ご希望の方は右のQRコードからお申し込みください(申込締切2月5日)。また、詳しい日程等については、当大学院ホームページ(https://www.edu.hirosaki-u.ac.jp/gs/wp-content/uploads/sites/3/2024/09/r6_MidtermReport.pdf)をご覧ください。



「2年次院生 最終報告会」研究テーマ

安達 大樹	不登校の予防に向けたプロアクティブな生徒指導環境の構築―教師による協働的な『魅力ある学校づくり』を通して―
葛西 良城	高等学校国語科における自立した学習者を育てる授業実践の検討―認知・メタ認知システムの往還を通して―
館田智久子	主体的・対話的進路指導の実践―生徒が自ら考え決定し表現することを支援する―
館山 収平	校内研修と学校組織変容の関係及びその要因に関する―考察―「専門職の学習共同体」の理論を手がかりに―
奈良岡幸輔	主体的・対話的で深い学びの実現に向けた教師の授業改善の意識向上を目指して―ICTの活用意識の変容とICT活用指導力の向上のための方策を通して―
原 文子	特別支援学校における同僚性について―子どもたちの学びの充実に向けて―
増淵 健	小学生のSNSにかかわるセルフコントロールの向上を目指す指導・支援―小学生のSNS依存状態への予防的教育と教育相談を通して―
村井千絵美	中学校英語科における生徒の自己効力感の育成―授業UD及びUDLの理念を踏まえた授業実践を通して―
藤田 桃	生徒が心身の状態と向き合うための養護実践―問診カードを用いた養護教諭の関わり―
安田 和未	小学校外国語科における自律した学習者の育成を目指した授業実践―イングリッシュ・パスポートの活用を通して―
市川 幸亮	高等学校数学科における統合的・発展的に考察する力を育む授業実践―ICT活用を通して―
金谷理利果	「見えないお金」を含む金銭管理の学習カリキュラムの開発と実践―中学校家庭科と修学旅行を架橋して―
瀧本 誠博	当事者意識の育成を図るための中学校社会科授業実践
成田 秀斗	健康行動の実践化を目指した保健の授業改善の試み―「真正性」に着目して―
佐藤 大智	知的障害教育におけるキャリア発達を目指した授業づくり―「なりたい自分」への気付きを、対話を通して表現する授業―

「1年次院生 年次報告会」研究テーマ

浅利 美穂	小学校低・中学年におけるポジティブ行動支援の取組を通じた、児童の行動と意識の変容に関する実践的研究
遠藤 彩華	地域資源を活用した安心安全な学校づくり―こども応援団立ち上げの取り組み―

高坂 洋輔	生徒の経験の違いによる学び合いを活用したキャリア発達を促す授業づくり—特別支援学校における縦割りや異年齢活動の実践を通して—
三戸 大志	中学校外国語科におけるA I (愛)のある授業設計の検討—方法を飼いならし、教科する授業づくりに向けた実践と省察を通して—
長嶺 海	高等学校における国語科と総合的な探究の時間の相互環流に関する実践的研究—評価のあり方と動機づけに着目して—
細田 瑛介	定時制高校における自己の課題と向き合う「総合的な探究の時間」—「対話」と「意識化」に着目して—
山内 千秋	心理的安全性を高めるための学級集団づくりが学力向上に与える影響
横濱 和也	自律的・継続的な校内研究の実現による教師の「研修観の変容」を目指す—仮説検証型研究から事実解釈型研究への転換を通して—
加藤 広之	高等学校商業における学習を「自分ごと」にするためには—パフォーマンス課題を用いた実践—
熊谷 翼	中学校における生徒の自己効力感を高めるための取り組み—授業・生活ノートでのレスポンスによる言語的説得を通して—
佐藤 希泉	児童の自己効力を高めるためのペア学習のあり方—算数科の自力解決の場面を通して—
佐藤 恒太	高等学校における主体性を育成する地理教育—認識の主体性に着目した授業実践について—
佐藤 謙	小学校における協同学習が学習成果に与える影響—認め合える関係を目指した視点から—
八木橋奈緒	一人一人が意欲と向上心をもち参加できる歌唱指導のありかた
山上 昭恩	音楽の療法的効果を用いた教育的アプローチに基づく音楽的支援
山谷 峻右	中学校理科における学習へのモチベーションを高める方策の検討—価値と期待に着目して—
久保 光彰	中学校数学科における学習意欲を高めるための授業づくり—全員参加の視点から—
高塚 夏海	古典を自分ごととして学ぶことのできる授業のありかた
前田 凌玖	中学校外国語科における英語が楽しいと思う授業づくり—動機付けに関する実践研究を通して—
三上 紘輝	協同学習による自己効力感の変容

院生の活躍

NITS 弘前大学センターの講座& コラボ研修

前号でお知らせしたように、今年度、NITS 弘前大学センターが開設され、弘前大学教職大学院の研修は、NITS 弘前大学センターの研修となりました。前年度に引き続き開催された「グロウアップ講座」は、ミドルリーダーコースの実習（90時間以上の研修参加）の機会としても位置づけられ、院生は4日間、ファシリテーターなど講座を支える役割を担います。ハロウィーンの日で開催された講座では、サプライズの受付が登場し、受講者も教員もびっくり、ほっこり。和やかな研修の1日となりました。

また、院生が企画・運営するNITS・弘前大学教職大学院コラボ研修「学校と保護者のいい関係づくり〜トラブルを大きくさせないため学校が気をつけるべきこと〜」では、小野田正利氏（大阪大学名誉教授）、木下晴耕氏（青森県スクールロイヤー）をお招きし、県内外の参加者とともに学びました。パネルディスカッションでは、院生がコーディネーター、パネラーとして活躍し、白熱した議論が繰り広げられました。



グロウアップ講座



コラボ研修

※ミドルリーダー養成コースの院生については所属校を記載しています。

ミドルリーダー養成コース

安達 大樹（青森市立甲田中学校）



ミドルリーダーとして学んだ教職大学院の2年間は、実践研究に取り組むことで、学校そのものの変化や成長を実感することができました。また、不登校をはじめ、学校が抱えている様々な課題に対し

て、率先して取り組み、挑戦していくことができる自信と力を育てていただきました。学校課題の本質を見出し、その解決に向けて「実践」と「省察」を往還する教職大学院での「学び」は、教員が協働的に実践し学び続ける術であり、教職大学院を修了したその先の教員人生においても、「学び続けていきたい」と考えることができました。お世話になった大学の先生方をはじめ、実践に協力して下さった勤務校の先生方へ、2年間、本当にありがとうございました。

葛西 良城（青森県立弘前高等学校）



教職大学院での2年間の学びの時間は、月並みな言葉ではありますが、何物にも代えがたい貴重なものであったと感じています。長年教員を続けてくる中でずっと抱き続けながらも、考えることができ

なかった自分だけの間について、初めて向き合い、じっくりとひたすら考えることができました。書籍や論文に没頭する時間は本当に贅沢な時間でした。2年目には、勤務校に戻り、改めて生徒達との生活が始まりましたが、これまで惰性で行っていた活動を、少しずつ意識的に行えるようになってきていると感じています。今回の研究発表で、すべての問題を解決し提示することはできませんが、今後の教員人生の基盤とすることができるよう、残りの研究の日々を丁寧に過ごしたいと思います。

舘田智久子（青森県立五所川原農林高等学校）



教職大学院で学ぶことによって、様々な「観」が変容しました。授業・生徒指導・進路指導…生徒と関わる上での意識と行動が変わったことを実感しています。また学校組

織の一員として、身に付けた知識やスキルをいかに学校現場に還元していけばより良い教育活動につながるのか、実践研究を通して試行錯誤しながら「理論と実践の往還」を体現する充実した2年間を送ることができています。教職大学院進学を応援してくれた家族、ご指導くださった教職大学院の先生方、管理職をはじめとして勤務校の先生方のご理解・ご協力を頂いたおかげです。心から感謝申し上げます。

舘山 収平（平川市立尾上中学校）



人生2度目の弘前大学での日々は「学ぶことのできる幸せ」を実感するものでした。そして、年齢も経歴も異なる同級生たちと共に学んだ月日は、人生最高の時間でした。

あっという間の2年間。でも今の正直な気持ちは「日暮れて道遠し」。教職大学院での最大の学びは「いつまでも学ぼうとする気持ち」の大切さを知ることができたことだと感じます。この年になり、ようやく当たり前のことに気付くことができました。

2年間の研究と学修を支えてくださった勤務校の先生方、教職大学院の先生方、そして2年間を共に過ごした素敵な同級生たちに、心からの敬意と感謝で一杯です。素晴らしい出逢いを、これからも温めていきます。

奈良岡 幸輔（六ヶ所村立尾駈小学校）



教職大学院での2年間は、様々な人と出会い、協働的な学び合いを通し、改めて学び続ける重要さを感じました。Society5.0の到来により社会全体のデジタル化が推進され、教育現場においても1

人1台端末によって急速にICTの活用が進んでいると感じています。時代の変化に対応し、子どもたちに求められる力やニーズも多様化していく中で、教職大学院での学びが修了しても、常に学び続ける教師として自己研鑽に励むとともに、同僚性を大事にし、学び続ける教師集団の形成に努めていきたいと思っています。最後になりますが、これまで実践研究に御協力くださった所属校の先生方、御指導くださった教職大学院の先生方に対し、心から感謝申し上げます。

原 文子（青森県立森田養護学校）



教職大学院での学びを通して、私の教育的信念が大幅に変わりました。①全ての人が「輝ける場所」「役割」「人権」があります。②学校生活での思い出を糧に、生涯成長を続けられる人を育てます。③人は一人では生きていけません。与え合い、協力し合い、助け合います。④自身のウエルビーイングの向上が、子どもの笑顔を生み出します。⑤教師一人一人の思いや違いを知ることが、納得できる授業づくり・子どもの見取り・評価につながります。以上を信じて、今後も実践を繰り返し、改善していく所存です。

教職大学院の先生方には学業だけでなく「人生の師」として要所で支えていただきました。何ものにも代え難い経験をありがとうございました。

教職大学院の先生方には学業だけでなく「人生の師」として要所で支えていただきました。何ものにも代え難い経験をありがとうございました。

増淵 健（五戸町立五戸小学校）



入学時のニュースレターにおいて、私は「学びの精神の根を広げ深めること」について述べたことを思い出します。2年の歳月が経ち、私が本学教職大学院で得たことは「学び続ける姿勢」です。これは、教員に求められる4つの力である自発的発展力、協働力、課題探究力、省察力に基づいています。特に自発的発展力については、日々の教育実践で培

入学時のニュースレターにおいて、私は「学びの精神の根を広げ深めること」について述べたことを思い出します。2年の歳月が経ち、私が本学教職大学院で得たことは「学び続ける姿勢」です。これは、教員に求められる4つの力である自発的発展力、協働力、課題探究力、省察力に基づいています。特に自発的発展力については、日々の教育実践で培

ってきた経験を教職大学院での学びを基に磨きをかけ、職能成長を意識し精進してきました。教職大学院での学びの深まりと広がりがあったからこそ、現任校での教育実践に深まりと広がりを感じています。最後に、これまで御指導いただいた先生方と共に学んだ仲間々に衷心より感謝申し上げます。

村井 千絵美 （五所川原市立五所川原第二中学校）



教職大学院での学びは、教育の視点を変えてくれました。実践研究では、学習者主体の学びを常に意識していましたが、生徒達に学びを委ねるには、今後も努力が必要だと感じています。学ぶことは

とても楽しいですし、これからも学び続けたいと決意を新たにしています。また、大切な仲間と親身になってくださる先生方に出会えたことは一生の宝物だと思っています。最後に、大学院へ踏み出す一歩を後押ししてくださった方々、実践研究に協力してくださった勤務校の先生方、指導してくださった教職大学院の先生方に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



学校教育実践・教科領域実践・特別支援教育実践コース

藤田 桃（学校教育実践コース）



教職大学院で過ごした2年間は、養護教諭としての考えだけでなく、他の教員の視点での考え方や子どもたちを取り巻く社会について学ぶことができ、貴重な経験を得ることができる場であったと考えています。授業での多くの学びや、実習校での生徒との関わりといった、すべての経験の積み重ねによって、養護教諭として大切にしたい思いを再確認することができました。この場所で得た経験を、これからの教育活動に生かし、春からは子どもたちの幸せを支える養護教諭として働いていきたいと思

入学期に想像していたよりもずっと密度の高い2年間でした。今は、教職大学院に入学して本当に良かったと、自信を持って言うことができます。

安田 和未（学校教育実践コース）



厳しい冬の寒さを乗り越えた頃、いよいよ新生活がスタートします。入学した当初は、勉強不足であることを痛感し、新たな知識を吸収することで精いっぱいでした。そんな日々がなつかしくなるほど、濃密な学校生活を送ることができました。「全員野球」を合言葉に親身になって支えてくださった先生方には心から感謝しています。

実習では、特別な経験することができました。子どもが喜ぶようにと願いながら教材研究をし、授業で生き生きとした表情を見ることができたときの胸が熱くなる感覚は今でも覚えています。これからの教員人生、山あり谷ありだと思いますが、素直に真正面から子どもと向き合う姿勢は忘れずにいたいと思います。

実習では、特別な経験することができました。子どもが喜ぶようにと願いながら教材研究をし、授業で生き生きとした表情を見ることができたときの胸が熱くなる感覚は今でも覚えています。これからの教員人生、山あり谷ありだと思いますが、素直に真正面から子どもと向き合う姿勢は忘れずにいたいと思います。

市川 幸亮（教科領域実践コース）



私は弘前大学教職大学院での多くの講義や実りある実習から、様々なことを学ぶことができました。例えば、教員として必要なスキルです。様々な授業や多くの実習を通して、

現代社会に求められている教育のあり方やその中で教員はどのように連携していくべきか等、教員として求められる能力を身につけることができたように考えています。また、数学科教員になる上で、私自身の数学教育に関する知見をも深めることができたように感じています。研究と向き合う上で、数学教育の中で大事にされている考えとその考えを生かし、どのように授業を組み立てるべきか、その一助をも得ることができました。

金谷 理利果（教科領域実践コース）



今年度は「見えないお金」を含む金銭管理のカリキュラムの開発・実践と題して、実践した授業の効果検証を行いました。最終報告会では、昨年度の年次報告会を受け、アンケート結果やワークシートの分析結果を報告します。教職大学院で過ごした2年間は、多くの経験をすることができました。子どもたちと関わることを通して、実態を掴むことの難しさや、伝えることの大切さを改めて実感した2年間でした。教職大学院で学んだことを、今後活かしていきたいと思いま

す。

瀧本 誠博（教科領域実践コース）



私は本学での学びで2つのことが印象に残っています。1つ目は、省察の重要性です。本学では講義や実習を行った後、必ず省察を行ってきました。省察を行うことで、

学んだことや実践したことを振り返ることができるため、自分の課題や今後やりたいことが明確になり、次に繋げることができました。2つ目は、授業実践への臨み方です。授業では生徒が主体となることが求められ、そのために、生徒が学ぶ内容を自分事として捉えることができるような問いや手立てを意識して実践しました。これにより、生徒が積極的に授業に取り組み、たくさんの考えを持つようになったと感じています。本学での充実した学びを、来年度以降に活かしていきます。

成田 秀斗（教科領域実践コース）



私が大学院に通おうと思ったきっかけは教師として働くことに漠然とした不安を抱えていたからです。「このまま教師として現場に出て自分にできることはあるのだろうか。保護者や生徒と良い関係を築いていけるのだろうか。」そのような不安ばかりが頭にありました。しかし、実習や講義を経て、日に日に自身の力が伸びていくことを実感できる日々でした。今は、現場に出るのが楽しみで仕方ありません。研究発表を2年間の集大成として成し遂げ、これからも保健教育について、生徒の学習のあり方について、研究と修養に努めていきたいと思っています。

佐藤 大智（特別支援教育実践コース）



授業実践と省察を通して、生徒の協働的な学びをいかにデザインすればよいか深く考えることができた2年間でした。特に印象に残っているのは、ICTを活用した授業

づくりです。自身が試行錯誤を重ねながらICTの使い方を身に付けた経験や、生徒たちが積極的に学習に取り組む姿は、非常に印象的でした。現在は、「Scratch」などのビジュアルプログラミング言語を活用し、楽しみながら協働的に学べる授業を構想しています。

1月末から、附属特別支援学校の小学部で講師として勤務することになりました。教職大学院で得た知見や経験をもとに、児童一人ひとりの強みを伸ばす指導や支援を実践し、児童とともに成長する教員として歩んでいく決意を新たにしています。



授業風景

※ミドルリーダー養成コースの院生については所属校を記載しています。

ミドルリーダー養成コース

浅利 美穂（青森市立浪館小学校）



教職大学院での1年があったという間に終わろうとしています。毎日授業後、みんなで教育について熱く語り合い、他愛もない話で笑いあった院生室での対話は、自分の考えや思いを見つめ直し、これから

頑張るぞと支えとなった大切な時間でした。これまでの自分を俯瞰して見ることで、教師自身が学び続けること、「当たり前」にとらわれず問い直し、変化を恐れずに取り組むことの重要性を学びました。また、子どもたちが安心して学べる環境を整えるためにも、できていないところに注目するのではなく、今「できている行動」を承認、称賛する関わりを増やし、子どもも教師も笑顔が増える学級・学校づくりを目指して実践していきたいと思っています。

遠藤 彩華（八戸市立城北小学校）



私にとって教職大学院生活は、知識の習得の連続でした。様々な学びの中で、特にこれからも大切にしていきたい教職大学院での学びは、理論と実践の往還、そして省察です。講義といっても所謂座学

ではなく、講義を通して学び、考えたことをアウトプットする機会が多く、理論と実践が行き来することで、現場で取り組んできたことが理論的に意味付けられ、日を追うごとに学びが深まっていきました。この1年は「何故、何のために学ぶのか」を問い直し、子どもを真ん中に据えた教育の実現のために何ができるのか、幾度も考えました。来年度は今年度の学びを生かし、未来を担う子どもたちのために何ができるのかを考えて実践研究を進めてまいります。

高坂 洋輔（青森県立青森第二高等養護学校）



これほどまで1年の早さを感じた年はありませんでした。後期に入ってから、多くの学校や関係機関を見学させていただき、そこでの対話を通して、新たな知見を得ることができました。多様な子どもたちの多様な学び方、生徒観・授業観のアップ

デート、組織的な対応など、理論として学び、現場での実践を見聞きするという、まさに「理論と実践の往還」を体感させていただきました。まもなく勤務校に戻り、実践研究を進めていくことになります。派遣していただいた青森県教育委員会や勤務校の先生方、そして様々ご支援いただいた教職大学院の先生方への感謝の気持ちを忘れずに、大学院での学びを目の前の子どもたちに還元できるようにしていきたいと思っています。

三戸 大志（田舎館村立田舎館中学校）



大学院での1年間は、教育の「流行と不易」を考える中で、教育の多様性と普遍性への理解を深めることができました。多くの先生方や仲間との出会いは、私にとってかけがえのない経験となり、教育

の現場で子どもたちから多くのことを学ばせていただきました。特に、ICT機器が急速に普及する現代においても、人間的な関わりが教育の根底にあることを再認識しました。Society 5.0時代を迎え、AIの活用も含め、教育はますます変化を遂げます。そのような時代においても、一人ひとりの子どもたちの成長を支え、共に学び、共に成長していくという教育の本質は決して変わらないと思います。この経験を礎に、教育現場で生かせるよう、一層研鑽を積んでいきたいと思っています。

長嶺 海（青森県立青森西高等学校）



「井の中の蛙大海を知る」1年でした。世界は知れば知るほど広く、深く、無知な自分に気づくと同時に彼我の差を埋めるべく落ち込む暇もないくらいに充実した日々でした。日々の実践には生徒と何

を目指すのかという目標と、なぜ何のためにという目的を定めること、それらを周囲と共有することが大切であると改めて学びました。いつもご指導してくださる教職大学院の先生方、共に学んだ院生の皆さん、研究のためインタビュー調査やデータ収集に協力してくださった先生方や、生徒さん、教職大学院を通して関わった全ての方々々に心より感謝いたします。4月からは学んだことを実践に活かし、学校、これから出会う生徒や保護者の方々々に還元できるよう力を尽くしたいと思います。

細田 瑛介（青森県立五所川原高等学校）



教職大学院での学びを通じて、自身の教師としての学びがいかに不足していたかを痛感すると同時に、新たな知識や視点などを得ながら自身が少しずつ成長している手応えを感じています。この経験に

より、「学び続ける教師」としての在り方を見つめ直すことができました。

私は、勤務校の生徒たちがこれからの社会を生き抜くために必要な力を身につけてほしいと願っています。その実現に向け、学校全体として、そして教師個人として何ができるのかを常に問い続けています。次年度はその思いを「総合的な探究の時間」を中心とした教育活動の中で具体化し、生徒たちの成長を支えていきたいと考えています。

山内 千秋（鶴田町立鶴田小学校）



以前、校務分掌を任された際、「先生のやりたいようにやっていいんだよ」と声をかけられたことを思い出します。しかし当時の私は、「踏襲すること」で精一杯で、その言葉の本当の意味を理解する

余裕がありませんでした。大学院で理論を学ぶ中で、「思い」はあっても「根拠」や「理論」が不足していたことに気づきました。授業では、学んだ理

論を土台に、現職の院生仲間と議論を重ねることで、これまでの実践を捉え直し、教育や学校、教師の役割を問い直す大きな学びを得ています。「こうあるべき」という固定観念に縛られるのではなく、「こうしていきたい」という未来を見据えたビジョンを描けるようになってきました。春からは現場に戻り、実践研究を進める中で、理論と実践を往還させながら、子どもたちが安心して成長できる環境づくりに努めていきます。

横濱 和也（六ヶ所村立千歳平小学校）



私の教職大学院生活はまさに「主体的で対話的な深い学び」の日々でした。学ぶほどに自分の力の無さを痛感したことも多かったですが、仲間たちと共に苦しみながらも「今できることは何か」を考え、充実した日々を過ごせたと思っています。

特に心に残ったのは、10月に実習の一環で弘前市内の小学校で算数の授業をさせていただいたことです。授業って楽しい、子どもたちの笑顔って最高だ、と改めて思うと同時に、「今までとは違う感覚」になりました。それは大学院で学んだ理論と自分のこれまでの実践が繋がり始めたからだと思っています。来年度は勤務校で、理論と実践の往還・融合を繰り返すことで、その「今までとは違う感覚」を具体化し伝えていきます。

学校教育実践・教科領域実践コース

加藤 広之（学校教育実践コース）



教職大学院でのこの1年の学びは、充実した濃い時間であったと感じます。初めは、授業についていくことができるのか、実習に対する不安などもありました。しかし、現在はもっと多くのことを学び

たい、学んだことを授業実践に活かしたいと挑戦することが楽しいと感じることができた1年であったと思います。来年度は「つなぐ・つながる・つなげる」の視点を大切に、研究や実習に臨みたいと考えています。今年度の経験を土台にし、さらに飛躍できるように向上心をもって学び続ける姿勢を忘れずに頑張りたいと思います。

熊谷 翼（学校教育実践コース）



新しい環境に身を置いてから今日までの、充実した時間はあっという間に過ぎたと実感しています。教職大学院での学びや生活で得られた考え方・理論と、連携協力校での実習を通じた実践を往還したことで、学部時代とは違った教育への視点を身につけた上で、生徒との有意義な関わりを築くことができたと思っています。また、個性を活かして共に学び、壁にぶつかった時の辛さを分かち合える同じ院生の存在が、自身の院生生活における原動力になっています。

今冬は雪が多く降り積もる中、自身の研究や次年度の実習等に向けて、これまでの学びを省察し、春の桜が美しく感じられるように力を蓄える期間にしたいと思っています。



佐藤 希泉（学校教育実践コース）



大学院生活を通じて、教員としてのスキルアップだけでなく、一人の人間としても成長できているように感じます。理論と実践の往還による複数の観点から、授業を見直すことで自身の課題が見えて

きました。また、段階的に設定された実習を経て、想定を超える児童の豊かな発想を潰してはならないと考えています。そのため、授業者としての思いや目の前の児童の実態、学習指導要領との関わりに葛藤することがしばしばあります。しかし、このもどかしさと向き合う日々がとても面白いです。

来年度から本格的に始まる研究では、算数科における自力解決の場面に焦点を当て、これからの教員人生を通じて考え続けていけるように探求して参ります。

佐藤 恒太（学校教育実践コース）



入学から現在まで、先生方やミドルリーダーの方々からの指導やストレートマスターの仲間との交流の中で日々の講義を受けられることに幸せを感じながら過ごしています。特にミドルリーダーの

の方々には様々な視点からのアドバイスを多くしていただき、日々の授業実践での力がついてきたと感じています。

今年度は大学院で学ぶ時間が大半を占めていましたが、来年度は実習校で授業実践をさせていただく時間の方が多くなっていきます。その中で今後の研究テーマとして、「高等学校における生徒の主体性の育成」を掲げ、授業実践と日々の講義に取り組んでいきたいと思えます。

佐藤 譲（学校教育実践コース）



教職大学院での1年間は、私に様々な変化をもたらした毎日でした。今までの教育観や授業観などを問い直す良い機会になったと思います。児童との関わりの中でも、今まで以上に児童のことを深く考

え、実態を見取ることができるようになった気がします。ストレートマスターの院生やミドルの先生方と、協働的に教育について学べたことも貴重な経験となりました。また、教育実習の中では、児童が協働的に学ぶことの難しさを痛感し、効果的な指導法や適切な子どもとの関わり方について考えるように

なりました。年次報告会では、これまでの成果を十分に発表し、新たな課題を発見する機会にできるよう精進してまいります。

八木橋 奈緒（学校教育実践コース）



今年度は学部時代に比べ、より専門的な理論と知識を深めることができました。特に、授業や研究を通じて得た知識を実習の場で実践することで、理解が一層深まりました。実際の現場での経験は、

学んだ理論を具体的な状況に適用する貴重な機会となり、問題解決能力やコミュニケーションスキルの向上にもつながりました。このような経験を通じて、専門知識を現場に役立てる重要性を実感しました。今後も学びを続け、さらなる成長を目指していきたいと考えています。

山上 昭恩（学校教育実践コース）



教職大学院で学ぶ中で、様々な歴史的背景と共に、教育を担ってきた多くの方々への思いや願いが積み重なって、今の教育があることを実感しました。そして、どのような姿を目指すことが子どもにと

って本当の幸せなのかを考える1年でした。講義や実習を通して、当たり前を問い直す機会が多く与えられ、特に、多様な環境に置かれる子どもの現状を知る中で、自身の無意識にこうあるだろう、こうあるべきという教育観があることに気づき、多角的な視点で支援の在り方を考察することができました。また、改めて自身が大切にしたい価値や信念に気づかされました。今後は、今年度実施した音楽の療法的効果を用いた実践を生かし、児童の心の安定に寄与する可能性を検証していきます。

山谷 峻右（学校教育実践コース）



大学院入学から1年が過ぎようとしています。私は教育学部出身ではないため、同期の院生と比べて知識不足を感じる場面もありましたが、授業や現場の先生方から学びを深め、多くの考察を重ねた1年でした。

その中で変わらないのは、子どもたちに「理科の楽しさ」を伝えたいという思いです。私が理科を好きになったのは、先生方がその魅力を教えてくれたからです。同じように、子どもたちに理科の面白さ

を伝えたいと考えています。

来年度は、生徒の「理科嫌い」や「理科離れ」を改善する方策について研究を進める予定です。理科を通じて子どもたちの未来の可能性を広げられるよう、これからも努力していきます。

久保 光彰（教科領域実践コース）



教職大学院の講義を通して、生徒指導や教育相談、学級経営の力量が高まったと思います。教育実習では、学校生活全体を通しての生徒との関わり、生徒の実態に合わせた学習指導の大切さを実感しました。

私の研究の目的は、レディネスの差が最も顕著に現れる段階である中学校で、全ての生徒が参加できる数学の授業を行い、生徒の学習意欲や思考力を高めていくことです。今年度は授業UDの知見を活かし、自作のフラッシュ型教材を用いた復習タイム、既習事項を黒板に残すことにより、遅れがちな生徒が授業に参加できました。来年度は今年度の取り組みを土台に、生徒が知識や技能を習得・活用できる授業づくりや評価の方法を考え、実践していきます。

高塚 夏海（教科領域実践コース）



院生の皆は疑問を見つけるのが上手だと日々の講義の中で感じています。自分だったら流してしまうようなことも掘り上げてじっくりと向き合う様子は、探究的な姿勢であり、まさに実践研究に必要な

ものです。その姿を見習い、自分も質問をしたり疑問点を書き留めたりするうちに段々と力がついてきたのではないかと思います。立ち止まって考えることができる今だからこそ多くのことを学び、院生や先生方の力をお借りしながら疑問を見つけること、問い続けることを大切にしていきたいと思っています。

前田 凌玖（教科領域実践コース）



この1年間は、生徒に英語学習の楽しさを実感してほしいという思いを胸に、動機付けに関する研究をしてきました。講義や授業実践においては、学ぶことの楽しさを実感すると共に、生徒にとって学

びやすい授業の形式や手立てについて常に考え続けました。今振り返ると、実習先の生徒の学びとよりよい教育を提供するために教職大学院で学んでいく

時間は、まさに学びの相似形であったと感じています。また、学会発表に挑戦する機会をいただき、自らの研究や教育の在り方をより深く考え、学ぶことができました。次年度は、これまでの講義や実践で学んだことを生かしつつ、新たな学びや課題に常に挑戦していきます。

三上 紘輝（教科領域実践コース）



教職大学院で学んだ理論や新たな視点から実習を振り返り、思いを持って取り組んだ授業など充実した1年が終わろうとしています。この1年間、多くの経験と思索を重ねる中で、教育の本質や生徒との

関わりの大切さを再認識しました。特に、実習を通じて得た様々な教育の難しさへの認識は私の研究において非常に貴重な宝になりました。これらの学びや気づきを胸に、今後はさらに研究を深めたいと考えています。来年度も、実習先の学校や大学院の先生方、そして私を支えてくれた親に心から感謝し、謙虚に邁進していきます。この経験を通じて、より良い教育者になれるよう努力を続けます。



授業風景

〈編集・発行〉

弘前大学 大学院教育学研究科教職実践専攻
(教職大学院)

〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地

Tel 0172-36-2111(代表)

メールアドレス

k-daigaku01@hirosaki-u.ac.jp